

# 明治前期・中期における 卒業証書授与式の意義

## 式手順の検討を通して

The Meaning of Graduation Ceremony at Beginning and Middle of Meiji Era:  
Based on Research of Ceremonial Programs

有本真紀

ARIMOTO, Maki

**【要旨】** 本論は、明治20年代末までに行われた式手順の検討を通して、初期の卒業証書授与式が果たした意義を考察することを目的としている。資料として用いたのは、新聞、教育雑誌、学校日誌、地方教育史であり、それらの断片的な記事を集積し関連づけることで初期卒業式の意義について論じた。

従来、卒業式を含めた学校儀式行事全般は祝日大祭日儀式によって性格づけられたと考えられ、卒業式はその成立年代すら明確になっていなかった。本論では、式の成立が1876年まで遡ることを明らかにしたうえで、軍学校、東京大学、官立・公立の高等・中等教育機関、私立学校、師範学校、附属小学校、公立小学校という学校種ごとに式の内容と当日の状況を検討し、卒業式が天皇制儀式の前史として位置づけられると結論づけた。それは、卒業式が規律・訓練を施した身体によるふるまいを多くの視線にさらし、洗練する作用を担うことによって可能となったのであった。また、多様な学業発表や娯楽の要素、メンバーシップの確認などの要素を含みこんでいた卒業式は、さまざまな学校行事へと分化していく源泉でもあった。種々の要素をそぎ落として定型化した卒業式が、後に人生の通過儀礼として認識され、別れの儀式として確立する過程を描き出した。

キーワード

学校行事、祝日大祭日儀式、規律・訓練、視線、唱歌・奏楽

## 1. 問題の所在

戦前期の学校行事、とりわけ儀式的行事に関する史的考察は、祝日大祭日儀式ばかりに眼が注

がれる傾向にある。勅語と御真影に象徴される天皇制儀式が 1945 年以前の日本の学校教育を貫く思想の顕現であったことは疑いなく、祝祭日儀式が注目されるのは当然かつ意義深いことである。しかしその陰で、他の学校儀式を対象とする研究が進展していないことが見逃されてきた。

卒業証書授与式(以下卒業式と略記)は祝祭日儀式より古く、近代学校制度の中でも最初期から実施されてきた儀式であり、しかも実践の場では現在に至るまでとくに重視される行事である。ところが、明治期学校行事に関して最も多くの記述がなされている山本・今野の研究(1973)においても、卒業式は入学式や始業式その他の儀式行事と合わせて著作全体のごく一部の扱いでしかない。ほかには開智学校や誠之小学校などの学校史研究がトピックとしてとりあげているのを除けば、個別の学校誌・史や地方教育史にときおり断片的な記載があるにすぎない。これらには卒業証書の写真や書式は必ず掲載されているが、卒業式の内容がわかる記録は希少であり、明治期の卒業式手順について横断的、包括的に言及する研究はなされてこなかった。

また、明治期の卒業式が有していた意義について、山本・今野が明治 10 年代を「学事奨励の儀式」、同 20 年代以降を「徳性涵養の儀式」ととらえているほかに目立ったものは見受けられない。論考の一部に卒業式をとりあげている石附(1995)や佐藤(2005)にしても、認定や褒章のための儀式、学校生活の区切り・終了といった意義のみを半ば暗黙のうちに前提しているばかりである。

本稿は、明治 20 年代末までに行われた卒業式手順<sup>1</sup>の検討を通して、初期の卒業証書授与式が果たした意義を考察することを目的としている。従来の研究が当時の卒業式の本質をとらえそこなってきたのは、式のあり方が成立以降それほど変化していないと錯覚させるほどに定型化しており、祝いと別れの場であることが自明視されているからであろう。たしかに、1891 年から 1945 年の 55 年間に限定して行われた祝祭日儀式の特異性に比べ、卒業式は現代まで途切れることなく年々繰り返され、歳時記にも定着した学校儀式である。だが、その起源をたどれば卒業式も「創られた伝統」のひとつであり、それは俗説にいう「日本人は儀式好き」といった理由から浸透したものではない。むしろ、日本の近代学校にどのようにして儀式が浸透していったのかを問うべきであり、その理由を祝日大祭日儀式規程の制定に求めるならば、「起源の記憶喪失」に陥ることを免れない。卒業式は、祝日大祭日儀式との関係においても問い直されなければならないだろう。そして、卒業式の意義を考察するにはまず、式の中で何が行われていたのかという具体的な事実から出発しなくてはならない。

なお本稿は、式それ自体の成立と定着過程について描いた拙稿(有本 2008)を受けて、式の内容に踏み込んで検討を加えるものである。また、日本の卒業式には斉唱や合唱といった歌唱行為が欠かせないが、明治期の多様な卒業式唱歌についての考察(有本 2007)を深めるための基礎としても位置づけている。本論が検討対象とする主な史料は新聞、教育雑誌、学校日誌、地方教育史などの記事であり、それぞれは全く断片的な記事であるが、それらを集積し関連づけることで初期卒業式の風景とその意義について明らかにしたい。

ここでの検討範囲を明治 20 年代末までとしたのは、式手順がほぼ定型化したのがおよそ明治 20 年代後半から末にかけてのことであり、それに伴って卒業式に対する意味づけや観念も固定していったと考えられるからである。しかし、定型化する以前の卒業式は、学校によってさまざまな手順で行われていた。とくに高等・中等教育機関と小学校とでは卒業式の成立時期が異なり、各学校の性格によっても手順に差異がある。さらに、同じ学校でも年代によって手順が変化しており、その手順の差異や変化は、式を企図し執り行った者たちが卒業式に込めようとした意味を

反映している。そして、その場に参集した人びとは、共にその手順を経験することで、卒業式という新しい儀式が創り出す意味を確認し合うことになったのである。

チュエによれば、「公共的儀式」は共通知識を作り出している社会過程の最も優れた例であり、共通知識を生み出す社会的行為である。この共通知識とは、「他の人々の知識についての知識」、つまり「他の人々が知っているということを人々が知っている」状態のことである（Chwe 2001 = 2003, p.10）。だが、明治初期には学校そのものが新奇な存在であり、さらに江戸期において公家や士族であった以外の多数の人びとは、冠婚葬祭や宗教的儀式のほかに公共的儀式というべきものを経験していなかった。公共的儀式である卒業式は、そうした時期に成立した学校行事である。チュエはまた、「儀式的順序の確実さは、反応を強要することによってではなく、共通知識の生成を助けることによって権威を生み出す」とも述べる（p.38）。卒業式は人びとの間に学校的な共通知識を作り上げ、学校という権威の社会的受容に役立っただけでなく、のちにより強力な権威の確立を後押しすることになる。それは、どのようなプロセスを経た、いかなる権威の確立だったのだろうか。その前に、定型化するまでの卒業式はどのような手順で行われ、どのような意義を有していたのだろうか。以下、式手順を学校の種類ごとに整理分類しつつ、考察を進めたい。

## 2. 高等・中等教育機関の卒業式

ここでは、官立私立の中学校以上の学校、伝習所および取調掛、その他の学校の卒業式について記述する。なお、師範学校については、附属小学校との結びつきや、後に成立する公立小学校卒業式への影響を考慮して後述する。

### 2-1. 軍学校

日本の近代化はなによりもまず、幕藩体制下の武士集団から、西欧的な訓練を施された身体の集合体である新政府の軍隊へと、組織を新たにすることによって着手された。明治初年に近代化を牽引しはじめたもう一方の組織は学校であったが、卒業式という新しい風習をいち早く取り入れたのが、おそらく軍隊が設置した学校であったことは、きわめて象徴的である。

管見の限り、最も古い卒業式の記録は、1876(M9)年6月29日に陸軍戸山学校<sup>2</sup>で行われた生徒卒業式である。讀賣新聞(1876.7.4)は次のように報じている。

生徒卒業式ハ廣い所にて先觀兵式があり夫より卒業證□渡され勝た人々へハ優等證また拔群の人へハ銀時計、圖引道具、などを下され（士官丈へハ東伏見陸軍少將がお渡しになり下士以下へハ長坂陸軍中佐が渡され式のあひだハ軍樂を奏しいづれも正服にて見事なことで有ったといふ  
(引用者注＝原文に閉じ括弧なし、□は文字が不鮮明)

觀兵式、軍樂隊、<sup>(ママ)</sup>正服という近代軍隊の道具立てがそろった中で、成績に応じて褒美がつかわれる。視線に開かれた空間は見事に整い、喇叭や太鼓による西洋式の音楽が響き渡る。——これが卒業式の前風景であった。しかも、与えられたのは近代的時間の象徴、銀時計であり、それは爾後長く優等生の証として卒業式に渡されることとなった。

一方、1876年8月に開校した海軍兵学校では、1877(M10)年以降毎年7月に優等生徒に時計等を授与する式を行った。これは新聞紙上では「賞与式」(1877年7月13日、1878年7月15日、1880年7月20日)「表彰式」(1879年7月8日)と記載されているが、内容としては前述の卒業式と同様である。

こうして軍学校に証書および褒賞を授与するための式が定着するなかで、その場には天皇が臨席するようになった。1878(M11)年7月3日の陸軍士官学校では、行幸の際第一の生徒に製図器、第二の生徒へ遠鏡が賞賜された。この授与に先立ち、生徒少尉3名が兵学説、築城説、砲兵説の講義を行い、騎兵教官の馬術、理化学実験(排気鐘の使用、酸素親和方の実験、越気力水中電光)、幼年生徒体操、諸科生徒の三兵操法、分列式が行われている。また、会場移動の途上で、生徒室図書房模型室の御通覧がなされた(朝野新聞、1878.7.5)。これは6月10日の開校式に予定されていた行幸が何らかの理由で実現しなかったための代替であったと考えられるが、手順はこの後行われるようになった天覧卒業式と大差ない。

卒業式としては戸山学校と陸軍士官学校で1880(M13)年から、海軍兵学校ではその翌年から天皇臨席が恒例となり、後に陸軍大学と海軍大学<sup>3</sup>も含め、これらの軍学校卒業式は原則として天覧となった。1880年12月24日の陸軍士官学校卒業式では、生徒の運動式、馬術、大砲打方などが天覧に供されている(讀賣新聞、1880.12.25)のだが、天皇の前では運動も「式」として行われたことが興味深い。1881(M14)年11月の海軍兵学校では「兼て同校にて卒業した生徒へ卒業証書を渡して有たのを返納させ更に本証書の授与式を天覧に成る由にて昨今式場を取仕組中」(讀賣新聞、1881.11.1)とあり、すでに渡してあった証書を一旦回収してまで、天覧で授与式を行うことへのこだわりがうかがえる。訓練を施した身体と、その身体によって修得した技を天皇に見せた上で、天皇の眼前で証書を受けるという儀式は、「天皇の軍隊」であることをすべての参観者が確認するのに最も条件の整えられた場であった。

証書がその紙片自体として意味をもつためには、誰から、どのような状況で、いかなる内容に対する証として授与されるかも問題である。卒業式は、「ひとつの制度化された地位の体系において低い地位から高い地位へ移行する、身分の昇格の儀礼」(Turner 1969=1976, p.237)と解することができる。制度化の緒に就いたばかりの軍隊、学校は、システムの確立を図るためにも「地位の体系」を揺るぎないものとして流布、定着させ、制度化を進める必要があった。そのためには、より上級の地位を保証する証書の授与を、単なる書類交付ではなく、多くの参観者が見守る儀礼的空間において執行し、周知の知識に仕立てるのが効果的であった。卒業式は、身分昇格の儀礼として組織されなければならなかったのである。

軍学校の天覧卒業式では、天皇のまなざしの中「<sup>(ママ)</sup>観兵式、成列運動、射的、銃創合闘、体操術」(陸軍戸山学校定期卒業式、讀賣新聞、1880.11.24)などが披露された後、証書と褒賞の授与が行われるのが常であった。明治5年から10年代末までに行われた巡幸において、「具体的な視察として天皇はなにかを見ようとし、民衆は天皇になにかを見てもらおうとして…『天覧、に供することを望んだ』(多木 2002, p.72)ことと照らせば、卒業式の視察は「小さな巡幸」に匹敵した。

とりわけ観兵式は、フジタニ(1994)の言を借りるならば「壮大・華麗な天皇のページェント」であり、「規律・訓練のスペクタクル」であった。そうしたスペクタクルが視野全体に繰り広げられたあと、こんどは集団ではなく特定の個人へとまなざしが注がれる。証書と褒賞の授与は、視線の獲得競争における勝者を浮かび上がらせる場であり、集団から個への視点移動という鮮明

なコントラストによって、その効果が高められたのである。

だが、ここで注意しなくてはならないのは、天皇の存在が明治10年代前半と明治20年代以降とで同一ではないことである。憲法、教育勅語、祝日大祭日儀式などによって他の権威の追隨を許さない絶対的なイメージを付与される以前、天皇は巡幸し、写真や肖像だけではなく実際の姿を見せることによって、自ら権威を獲得していく途上にあったと解される。軍隊を一望の下にまなざし、その集団の中から優秀な者を見出して褒賞する存在であることは、天皇が王としてのまなざしを獲得することと対をなしていた。各地で大小の内乱が続いていた時期、未だ権威を確立しえていない不安定な王権と創設間もない学校は、見る／見られる関係、褒賞を授与する／拝受する関係において、互いの権威を高め合い、地歩を固めようとしていたのである。

フーコーは言う。「規律・訓練には、それ独自の儀式的型がある…試験・検査の豪華壮麗な形式たる《観兵式》である」(Foucault 1975 = 1977, p.191)と。規律・訓練的な権力は不可視であり、服従する臣下こそが視線を向けられ明るみに出されるのであって、観兵式はその特有な儀式だという。しかし、明治初年まで、天皇は見えない存在であった。権力の中心に天皇を置き、さらに西欧的な近代化を果たそうとする目論見が成功するためには、臣下を可視化するだけでなく、天皇も一度は見える存在になる必要があった。

しかも、最初期の卒業式は試験の結果に対する褒賞の儀式として成立した。これもフーコーに従うなら、試験は「権力の新しい様式の出現を明示する」ものであり、「個人を権力の成果および客体として、知の成果および客体として構成する…諸方式の中心に位置」(Foucault 1975 = 1977, pp.194-195)する。続けてフーコーは、伝統的な権力においては儀式によって上昇方向の個人化がなされるのに対し、規律・訓練的な制度の中での個人化は、監視によって下降方向になされるという。権力が匿名的になるにつれて、権力が行使される相手は一層明確に個人化されるというのである。

だが、日本の近代化の端緒においては、天皇と試験を行う場（このときは学校であり軍隊でもある）が二つの新しい権力であることを、人びとの共通知識に仕立てていく必要があった。天皇への視線、規律・訓練を施した集団への視線、その中での成功した事例＝個人への視線が交叉し織り成す儀式が、軍学校卒業式だったのである。

## 2-2. 東京大学

東京大学第1回卒業式は、1877(M10)年12月19日に行われた。このとき卒業証書を授与された理学部化学科の3名はすでに同年7月に卒業していたが、「卒業式の方法等に関し議論ありし結果」数カ月を経てからの式となった。「午後一時に文部大輔総理同補其ほかハ高座に着れ卒業生徒ハ高座の下に並び雇教師教授其ほかとも着席が定まると」、濱尾大学総理補が学事報告を行い、加藤大学総理が証書を授与、「加藤総理、中村正直学監モルレー交々起ちて演述するところありて」2時間ほどで式を終え、祝宴が開かれた（讀賣新聞、1877.12.20 および『東京帝国大学五十年史』上冊、1932, pp.484-486）。濱尾総理補の報告は「学校創立以来今日まで沿革の大略」であり、この学事報告と証書授与、加えて学内の要職にある者や来賓の演述という三つの要素からなるのが、初期卒業式の最も簡潔な手順である。

最初の卒業式において、総代以外の卒業生は証書を受け取り、話を拝聴するのみの受動的な立場だったが、1878(M11)年3月29日の医学部第1回卒業式では池田総理の奨励の辞に対し卒業生

総代が答辞を述べ、さらに製薬学本科卒業生9名全員が各自の研究について演述を行った(『東京帝国大学五十年史』上冊, 1932, pp.488-489)。卒業生が研究した成果を披露する形をとっており、卒業式が学業成果発表の場としても活用されたことがわかる。このように、式中に卒業生全員が個人の成果発表を行う例は多くなく、高等教育機関の初期の卒業式に限られている。

さて、上記2回の東京大学卒業式についてはこれ以上の記録に接していないが、1878(M11)年7月8日の第2回卒業式、同12月24日の元開成学校物理学科第1回卒業式では、興味深い会場配置と手順が記録されている。「講義室の正面に□聖上 皇后宮の御真影を掛け花瓶に種々の花を挿ミ牖戸毎に國旗を掲げ」(朝野新聞, 1878.7.10)、着席配置が定められた式の状況は、後の祝祭日儀式と酷似している。この「御真影」は、1874(M7)年に東京開成学校へ下賜されたものと推測され、「拝礼対象ではなく官立機関への『下賜』例に準拠したもので、のちの拝礼のものより小型」であったという(佐藤 2002, p.106)。他の主要官立学校に御真影が下賜されはじめたのは1880年代に入ってからであり、府県立の師範学校への下付が1887(M20)年から、高等小学校への下賜決定が1889(M22)年末であることを考えると、これが学校儀式に御真影を飾った最初期の例ということになるだろう。なお、この写真は1873(M6)年に内田九一によって撮影された青年天皇の姿(多木 2002)と考えられ、後年全国の学校へ下賜されるようになった1888(M21)年撮影の御真影とは別物である。こうして、学校に祝日大祭日儀式が導入される10年も前から、卒業式に御真影が掲げられたことになる<sup>4</sup>。軍学校とは異なり、1898(M31)年まで卒業式に天皇が臨席することはなかったが<sup>5</sup>、国家事業として始まった学校教育システムの頂点に立つ大学で卒業生を出すという祝祭は、国家の祝典に準ずるものと意味づけられていたのだろう。

そう推測させる、もうひとつの要素が奏楽である。1878(M11)年以降の東大卒業式では、陸軍軍楽隊による奏楽が恒例であった。つまり、国家の演奏集団が派遣されていたのである。東京日日新聞(1878.7.10 および 12.21)には、上述の1878年7月8日と12月24日の式手順が掲載されている。それによれば、一同「着床」の後、奏楽によって式が開始された。曲名は不明だが、最初の奏楽は10分、あるいは6～7分と時間が記録され、その後も授与と一人一人の演説が終わるたびに奏楽が挿まれて、式の最後にも奏楽が行われている。音楽が日常の時間と祝祭の時間とを区分し、式の進行を担っていたといえよう。この手順から、すでに式典には音楽が付随すべきであり、それには西洋音楽がふさわしいと考えられていたことがうかがえる。明治10年代初頭に、西洋音楽を公開できるほどに演奏できた団体は、G.C. ダクロンの指導を受けた陸軍軍楽隊、およびJ.W. フェントンから伝習を受けた海軍軍楽隊と式部寮雅楽課伶人たちに限られていた。卒業式は、西洋音楽のデモンストレーションの場でもあった。

さて、それまでの計4回が「卒業式」であったのに対し、1879(M12)年6月、大学の卒業者に「学位」を与えることが決定したことにより、同年7月10日以降の式名称は「学位授与式」となった。これ以降1回の例外(1882年10月)を除けば、東京大学では毎年1回7月10日前後の挙行が定着した。

軍学校卒業式では観兵式や体操術などが多くの時間を占めたが、大学でそれに代わるのは教員と来賓の演述であった。たとえば、第1回学位授与式で演述を行ったのは加藤大学総理、法学教官テリー、地理教官ザブウスキー、化学教官アトキンソン、田中文部大輔であった。このほかに学事報告と過去の卒業生を含む50余名を順次に呼び出しての授与が行われた式は、3時間を要したと記録されている。また、夜7時からの開式に先立ち、5時半からは、「動物金石機械模型

図書」といった理学科の諸列品が来賓の縦覧に供された<sup>6</sup>。結果として、学生たちを取り巻く大学の人的、物的教育環境を学外者に示す機会になっていたといえる。

手順としては1880(M13)年以降「報告、授与、祝辞、答辞、演説」が定型化していたが、明治10年代後半からは次第に演述にかかる時間が短縮化され、同20年代には報告も省略されて、明治23年の式は所要時間1時間半ほどであった。目を引くのは、簡略化した手順となる以前の式が、夜に行われていたことである。また、来賓と卒業生の父兄親戚だけに参観が許された軍学校とは異なり、東大では一般の人にも「無切手にて」参観が許されていた。この新しい習慣は、「盛大であること」が必要とされていたのである。参観者が式をどのように受け取ったかについては後に考察するが、多くの参観者を集めての一般公開が、卒業式という新しい儀式を広めていくのに役立ったことは間違いない。

### 2-3. 官立・公立学校

軍学校や東大に遅れて設置された官立・公立学校では、その分だけ卒業式の開始も遅い。ここでは師範学校を除き、特徴的な学校を中心にとりあげたい。

1886(M19)年の大学令によって東大とともに帝国大学に編成される工部大学校は、1877(M10)年に設置され、1879(M12)年11月8日に初の卒業生を出した。この日、「仕掛大烟火」「仕掛手筒」(読賣新聞, 1879.10.30)が披露された。後に海軍兵学校も「煙火八十四本打揚げ」(朝野新聞, 1882.7.9)「水雷火」(読賣新聞, 1883.10.16)打ち上げを行うのだが、それらは生徒が製造したものである。学んだ成果の披露ということになるが、これだけスケールが大きければ、学校の内輪の発表とはいえない。音、光、水柱、煙などの効果は、学校とは無縁の人びとにも卒業式がいかに重大な祝祭であるかを知らしめ、学校と国家の威信を顕示することになる。

技術系でない官立学校の授与手順は一般に簡潔で、授与のほかに行われるのは学事報告、祝辞、答辞(謝辞)、演述のみである。なお、答辞は、最初期には来賓の祝辞に対して校長が述べる例もみられるが、明治10年代中葉までには卒業生総代が行う形に定着した。

官立学校では、政府高官や他の官立学校関係者が多く臨席する式が行われた。大阪中学校(文部省直轄)でも、松方参議、東大総理、陸軍少将、大蔵技監、大阪府知事、在阪各県長次官等が臨席した(『大日本教育会雑誌』11号, 1884.9)。こうした来賓たちは、主な学校の卒業式が行われるたびに参集しており、この人的交流によって儀式の定型化が促進されたと考えられる。

さて、官立学校の中には、特別な技能を伝習する学校も含まれていた。体操伝習所もそのひとつである。その卒業式には文部卿以下顯官が臨場し、午前が祝辞や演述等を含む通常の授与式で、午後は卒業生が体操場で体操を行った。「此ときピアノの合奏」(読賣新聞, 1881.7.15)もあったと記録されているのは、音楽に合わせて体操を行ったということだろうか。軍学校でも卒業式が成果発表の場となっていたが、伝習所では修めた西洋式の技能を披露することが卒業式の大きな意義であった。それは、個人が身につけた技能であると同時に伝習所の成果であり、国家事業の進展を示す好機でもあった。まさに、学校という場と、そこで繰り広げられる教育の様を見せることに卒業式の意味が見出されたのである。

私塾の扱いから1884(M17)年に宮内省所轄となった学習院卒業式の特徴は、皇族の出席に加え、奏楽と唱歌が早い時期から取り入れられていたことである。1881(M14)年4月の卒業式は天覧で、「男生徒の体操女生徒の唱歌」が行われた(東京日日新聞, 1881.4.14)。この少し前に監事となった

能勢栄は教員を大量に黜陟、粗暴な生徒は放逐し、教則改正を行っており、「面目を一革し燦然として進歩の色を呈はしたるに由り」、その授業法を見たいとの「思召」によって天覧となったようである。その際、体操と唱歌の披露は学校改革の成果を示すのに適していたということだろう。雅楽課伶人を介して音楽取調掛とも関係が深かった学習院では、東京師範、東京女子師範に次いで唱歌教授が始められていたことが卒業式にも反映していた。

東京音楽学校の前身である音楽取調掛は1879(M12)年10月に設置された。学制に教科として示されたものの、実施に至っていなかった「唱歌」を全国に普及させていく原動力となったこの機関は、卒業式への唱歌導入についても中心的役割を果たした。取調掛自体が証書授与を行うようになるのは1883(M16)年だが、それ以前に東京師範、東京女子師範の卒業式に掛員を派遣して奏楽を行ったり、L.W.メーソンほかの教員に通常の唱歌授業に加えて卒業式直前の出張唱歌教授に当たらせている。

音楽取調掛が初の伝習生に入学を許可したのは1880(M13)年10月のことで、以来本科生に加え全国から府県派出の伝習生が集まるようになった。取調掛の証書授与からは、卒業式が成果発表の場として成立したことがはっきりとみてとれる。取調掛が公開の場で初めて「証状」を授与したのは、1883(M16)年7月11日の「期末演習会」でのことである<sup>7</sup>。東京芸術大学所蔵の『音楽取調掛時代文書綴60』に残る当日の手順を抜き出すと次のとおりである。「午前十時 唱歌／掛長演説／証状授与／唱歌」「午後第一時 掛長演説／唱歌／洋琴／管弦楽／洋琴／唱歌／俗曲(長唄、箏曲)」「(曲名等詳細略)。ここから推測すれば、午前が授与式部分、午後が演奏会ということになるだろう。『音楽取調掛時代文書綴34』では、この催しの名称を「閉場式」と記しており、現在でいえば終業式に相当すると考えられるが、実際には年度末の成果発表会と授与式を兼ねて行ったことになる。ただし、このとき証状を受けた11名は全科卒業生ではなかった。

初の全科卒業生が出たのは、一時的に音楽取調所と改称された1885(M18)年である。授与は、7月20日の「卒業演習会」において行われた。このときは、授与式が演奏会の中に組み込まれており、洋琴独奏、唱歌、洋琴連弾、伊澤所長報告、証書授与、森御用掛演説、洋琴独奏および連弾、本邦俗楽、洋琴独奏、欧州管弦楽、弦楽四重奏、大木文部卿演説、唱歌という手順であった(『大日本教育会雑誌』22号、1885.8)。1887(M20)年2月には「卒業証書授与式并に音楽演習会」の名称になり、最初に神津主幹と伊澤文部省編集局長の演説、辻文部次官の祝詞があり、演奏会が行われた後「報告、授与、祝詞、謝辞」の授与式部分があって、最後に管弦楽と唱歌で締めくくられている(『大日本教育会雑誌』50号、1887.2)。これが、1894(M27)年からは先に授与式を行ってから演奏の形が定着し、東京高等師範附属音楽学校となった期間を含め、一貫している。演奏会が先か後かの違いはあっても演奏主体の卒業式であることは変わりなく、毎回満員の聴衆を集めて行われた。

この演奏に含まれる具体的な唱歌曲目の変遷については稿を改めるが、初期には他の器楽演奏同様成果発表の位置づけであった唱歌(合唱)が、1890(M23)年ごろからは別れを意識させる内容の曲となり、他の器楽演奏や独唱とは異なる意味をもつようになったことは注目すべきである。

公立の中等教育機関卒業式についてはかなり資料が限られているが、そのうち東京府尋常中学校の例をあげておきたい。同校は明治20年代に入ってからの手順しか入手できないため、それ以前も同様の傾向であったか不明だが、少なくとも1888(M21)年7月14日の式では、体操の成果発表を重視した手順をとっている。「柔軟体操、兵式技藝、器械体操、論文朗讀、証書授与、



校長祝辞、生徒答辞、賞状授與等」(讀賣新聞, 1888.7.15)という手順は、論文朗読という個人発表を含んでいるものの、身体を使った集団訓練の成果発表に重きが置かれている。この手順は、大学より軍学校や体操伝習所のそれに近い。これが1890年代になると、午前に授与を行い、昼食を終えてから運動会という手順に変わっている。1891(M24)年4月13日の式では、「正午より競争撃剣等數十番の演技をなし、午後六時に至て閉場」(『教育時論』217号, 1891.4.15)した。同じ年の6月17日に文部省令第四号「祝日大祭日儀式規程」が出され、その第四条に「生徒ヲ率キテ体操場ニ臨ミ若クハ野外ニ出テ遊戲体操等生徒ノ心情ヲシテ快活ナラシメンコトヲ務ムヘシ」とあるのを受けて祝日大祭日の運動会開催が普及していくことになるが、卒業式と運動会の結合はそれより以前に行われていたのである。

以上、官立・公立学校の卒業式について述べたが、これらの儀式的あり方は軍学校と東京大学の例を下敷きにしつつ、各学校の特性によって変形が施されていた。それは、成果発表に重点を置く型と、授与と祝辞答辞を含む演述だけの簡潔な型とに大別でき、成果発表は各学校の特色を最大限にアピールできるよう企図されていた。簡潔な型は、次項で述べる私立学校卒業式のほか、明治20年代に入って警官教習所、国家医学講習科、郵便電信学校など多様な学校が授与式を行う際にもモデルとなった。一方、成果発表重視の手順は、師範学校および小学校の卒業式にも、いく分異なった形で影響していく。いずれにせよ、官立・公立学校は軍学校と東京大学が発信源となった儀式を多様な型のモデルに変換して示し、他の学校へと伝播させていく役割を果たしていた。

## 2-4. 私立学校

私立学校の中でも早期に設立され、卒業式の実施も早かったのは、キリスト教系の学校である。同志社は1875(M8)年設立で、1879(M12)年から卒業式を行っている。そのうち内容のわかる1880(M13)年6月の第2回、および1882(M15)年の第7回はほぼ同様の手順で、「奏楽、祈祷、演説・作文(含英語)、奏楽、演説・作文、卒業証附与、奏楽、祈祷」となっており、卒業生全員が演説や作文朗読を行っている。「奏楽」は、オルガンに合わせて讃美歌を歌う「奏楽唱歌」であった(籠谷 1998, p.272)。讃美歌と祈祷によって式が始まり、中間に讃美歌が挿まれて、最後に讃美歌と祈祷が配置される枠組みの中に個人の成果発表と授与が位置づけられる手順は、「卒業礼拝」と「弁論大会」を兼ねたようなものにとらえてもよいだろう。

卒業生の演説に多くの時間を割くこの手順は、同志社では1892(M25)年まで続き、その翌年から来賓演説に代わった。卒業生の増加という要因もあっただろうが、籠谷はこの変化を「学校の内輪の儀式であった卒業式が外部を意識した儀式となったことを意味している」(籠谷 1998, p.272)と述べている。たしかに、設立当初のキリスト教系学校に対しては奇異の目が向けられることもあって、理解を寄せる人びとの中で比較的小さなコミュニティを形成する傾向があったと考えられる。

そうしたコミュニティにとって、卒業式はメンバーシップを確認する場でもあった。東京英和学校では、11名の卒業生に対し「内外の牧師傳道師を初めとして同校の招待を蒙りて臨場せし貴顯紳士基督信仰老若男女」が多数参集し、「式場に臨まず空しく歸りし人」も出る状況だったという(『教育報知』126号, 1888.7)。卒業式は、招待する／されるという関係にある者たちが集い、その紐帯を強める場としても機能していた。

しかも、キリスト教系学校では3日ないし4日をかけて卒業式を行うケースもあった。たとえば1887(M20)年6月の明治学院第2回卒業式は、26日に卒業演説、27日に懸賞英語演説、28日は体操運動と英和文学会員の会合、29日が証書授与式であった(讀賣新聞, 1887.6.28)。東京英和学校でも、1888(M21)年7月の卒業式は3日間をかけており、翌年は6月23日が米国人の説教、25日が九鬼隆一の演説、26日は文学会員の演習、27日が証書授与式という計4日間が「卒業式」と位置づけられている。

ここで目につくのは、文学会の会合や演習といった、特定されたコミュニティの活動が含まれていることである。証書授与の1日だけを卒業式といわず、数日にわたって既卒者や関係者が集まる機会として企画されているのである。各々の催しが対象とする参加者の範囲は、会員であったり信徒であったり必ずしも同一ではない。ここから、コミュニティとして複数のレベルが想定されながら、卒業式という一連の催しにおいて学校との距離が意識される。より外部に向けた儀式になるほど、内輪は結束してその準備と遂行に当たらなくてはならない。卒業式が外部に向けた儀式として整えられていくことで、その学校関係者の紐帯はさらに強化されたと考えられる。

一方、非キリスト教系の私立高等教育機関のうち、後の専門学校令で専門学校となる学校の卒業式には、比較的簡潔な手順が多い。たとえば、1884(M17)年7月26日の東京専門学校第1回「得業証書授与式」手順は、本校の報告、証書授与、校長演説、得業生総代答辞、前島密、中村正直ら来賓数名の祝詞演説となっている(『大日本教育会雑誌』10号, 1884.7)。1888(M21)年からは、優等生への賞品授与と奏楽が記録されているが、手順の概略はその後も一定である。しかし、記録に残る来賓数は年々増加し、1890(M23)年に講堂が新築されるとさらに盛大になって、授与式について校友会が開かれた。ここでも、既卒者や支援者のコミュニティが形成され、卒業式はその参集の機会となっている。

さらに、1892(M25)年の記載からは、盛況ぶりとともに華やかさが感じられる。「式場の首座にハ大隈伯爵夫人聖麗潔白なる洋服をつけて着座し場の中央にハ飾水数台を置いて初期を掃ふの具となしたるなぞ装置頗る美麗なりし」。また、式終了後の立食では、「赤衣白袴の陸軍楽隊が青氈を敷きたる如き芝生の間に立ちて數番の奏楽を為したるハ眼も醒むるばかり鮮美」だったという(讀賣新聞, 1892.7.17)。学校と大隈伯夫人から優等生へ賞品が授与され、東大と同様に陸軍楽隊の演奏もあって、配慮の行き届いた会場の様子からは、対外的な面目を強く意識した性格の式となっていたことが推察される。

明治20年代に入ると私立学校の生徒増加は著しく、多くの学校では年を追うごとに卒業式の規模が膨らんでいた。また、なかには競うようにして数多くの来賓を集め、学外の会場を借りたり、大講堂を新築して盛大な式典を催す学校もあった。そのため、一部の学校ではこうした風潮に対する批判や反発も生まれていた。その最も先鋭な形が、卒業式を行わないことであった。

明治法律学校ハ追々盛運に向ひ今ハ千三百餘名の學生を養成し殊に本年ハ廣告欄内にもある如く四百餘名の卒業生を出したる次第なるがしかし今に尚卒業証書授與式を舉行せざるハ何故なりしやと云ふに卒業証書授与式ハ學問未だ發達せざる時代に在りて或ハ學生獎勵の一方方法となる可きも右ハ元來虚飾に過ぎざるものなれば同校に於てハ開校の際より断然其主義を取らず故に本年の如きも其式を舉行せざるなりと云ふ (讀賣新聞, 1890.8.18)

しかしこの記事は、卒業式批判がニュースとなり、「虚飾」といわれるほどに盛大なものとなっていたことを物語っている。卒業式の記事には、来賓の氏名や参観人数が示され、「なかなか盛んなことであった」というコメントが決まり文句となっていた。すでに卒業式は校種を問わず定着し、コミュニティのメンバー内にも対外的にも、盛大さを誇示する重要な学校行事となっていたのである。

他方、女子を対象とする中等教育機関でも卒業式は重要な学校行事となっていたが、簡潔な手順をとる男子の高等教育機関とは異なる、特徴的な卒業式が見られる。ひとことで言うならば、「おさらい会」に授与式が接続したような手順である。周年行事である「紀年会」と授与式が同日に催された成立学舎女子部では、とくにその傾向が色濃い。1889(M22)年4月1日の第二記念会は「淑女たちの学芸」の前後に唱歌が歌われ、続いて第一回卒業式が行われた。そこでは、舎長からの証書授与と祝辞、総代の答辞の後、唱歌、オルガン独奏、箏・オルガン・胡弓による合奏などが披露された(讀賣新聞, 1889.4.3)。途中で祝辞や演説が挿まれているが、和洋の音楽発表会といった趣である。翌年以降は紀年会と卒業式が一体化して、唱歌や合奏に英語対話、英語暗唱等も加わり、休憩を挿んで盛大に催された(讀賣新聞, 1890.4.2, 1891.4.3)。

明治女学校では、「薙刀を以て女子体操の一部に加ふるなど世俗に異なる一種の教法を執り来り昨年一月より新たに速記法を教授」した。その成果は早速卒業式で紹介された。教頭の演説を卒業生に速記させ、来賓には「薙薙版に摺り立て土産として配布」したのである。その出来栄は「神速巧妙なる實に男性速記者に比して優るとも劣るべくも思はれざりし」(讀賣新聞, 1891.2.24)ほどであった。このように職業に直結する技能のこともあれば、良妻賢母育成型の教養的な学芸のこともあったが、女子教育の卒業式では男子以上に学習成果や技芸の発表が重視される傾向があったといえよう。

### 3. 師範学校と小学校の卒業式

#### 3-1. 師範学校令以前の師範学校

官立師範学校の設立は1872(M5)年5月のことで、翌年1月には附属小学も下等小学のみではあるが設置された。その時期からすれば、1870年代半ば前後には卒業式が行われていてもおかしくないのだが、讀賣、東京日日、朝野の各紙に該当記事は見あたらない。また、附属小学が設置されて約10カ月後の『文部省雑誌』第6号(1873.11.18)には「下等小學第七級及ヒ第八級卒業証書ヲ與ヘシ人員」が本籍地、族籍、保護者名、続柄、本人氏名、年齢入りで発表されているが、証書をどのようにして与えたのかは記されていない<sup>8</sup>。後述する公立小学校同様、当時は証書を渡す機会が儀式として成立していなかったか、儀礼的要素をとまって授与されたとしても、学校内部に限定された催しであったことが考えられる。

師範学校で初めて「卒業式」の記録が現れるのは、1879(M12)年2月13日に行われた東京女子師範学校第1回卒業式である<sup>9</sup>。同校は1875(M8)年11月に開校し、開校式は皇后行啓の下に行われたが、皇后は最初の卒業式にも臨席した。この卒業式は本来1カ月ほど前に行うはずであったところ、「御不例にて御延引に成って」(讀賣新聞, 1879.2.21)いたのであり、皇室の都合が優先されていたことがわかる。

手順は以下のとおりである。午後一時に文部大少輔はじめ生徒等も校前にて奉迎後、皇后は校内に御着座、主だったものが礼謁した。式場の講堂へは文部大輔と摂理が先導して、皇后は洋琴の奏楽がなされる中を進御し、生徒等礼謁後の演説は文部大輔が行った。次いで摂理が卒業生徒人名簿を呈するとそれに対する御詞があり、摂理が答辞演述を行った。さらに幹事教員が「生徒学業進歩ノ景況」を、助訓が授与式の祝辞を述べた。

ここまではまさに儀式の手順でしかないが、このあと「卒業生徒三名理化学ノ試験ヲ御覧ニ供シ且ツ作文朗読」が行われた。次いで本科生ならびに予科生に対して摂理より卒業証書授与が行われ、そのあとに唱歌が歌われた。これで講堂での式は終了し、その後皇后をはじめとする来賓たちは附属練習学校へ進御して教場を通覧、さらに体操の発表にも接している。軍学校でも理科実験や体操が天覧に供されたわけだが、これらは女子にとって当時最先端の教育内容であった。とくに女子の体操は忌避される風潮すらあった。そこで、生徒が学んだ結果を示すことによって、学校教育の大本たる場での成果を披露し、列席の教育関係者にも最新の教育事情を広く知らしめることに主眼が置かれたと解される。

このとき歌われたのは西洋式の唱歌ではなく、式部寮雅楽課が作成した『保育唱歌』からの4曲であり、うち1曲は皇后御詠の和歌〔学之道〕に曲をつけたものであった。「みかかすは」で始まる〔学之道〕は、1876(M9)年2月に皇后が女子師範に下賜した歌で、同校の校歌となった歌である。唱歌は学制に教科として示されていたものの「当分之ヲ欠ク」と但書が付され、他の学校では教授が始められていなかったから、まさに女子師範学校ならではの成果発表であった。そして、これが卒業式に唱歌が歌われた最初であり、校歌が歌われた最初の学校儀式でもあった。卒業式の歌といっても、友との別れや師への感謝といった内容ではないことが注目される。

東京師範と東京女子師範の卒業式については、1886(M19)年4月10日に師範学校令が公布されて以後大きく変化することになるが、それ以前の両校の手順を押さえておこう。

東京師範では、証書授与と校長演述、卒業生の謝辞という手順が原則で、時々の状況によって文部省頭官の演述や卒業生の論説(1884年のみ)が加えられた。演述を行った来賓の中には、西周、九鬼隆一、福羽美静、福岡孝弟らの名前がある。また、1881(M14)年と翌年には音楽取調掛へ掛員の出張を要請して「奏楽唱歌」「管弦楽奏楽」が行われた記録があり、1882(M15)年については曲目も判明しているが、それ以後は奏楽の記録が見られない。たいていは証書授与と校長演述、謝辞のみで短時間のうちに終わっており、卒業式としては非常に簡潔な手順である。1884(M17)年と翌年は、同じ日に附属小学校の卒業式も行われているが、それと比べるとシンプルさが目立っている。

東京女子師範において、皇后臨席による最初の卒業式にあった理科実験、作文朗読、体操はその後行われなくなったが、奏楽・唱歌は一貫して取り入れられていた。しかも、最初の来賓入場に際して奏楽と唱歌があり、式の最後にも唱歌を歌い、奏楽の中を来賓が退場する手順が定着していた。女子師範では校内で唱歌を教授するだけでなく、音楽取調掛へ出向いて伝習を受けに通う生徒も多く、奏楽・唱歌が盛んであった。そのため、軍楽隊による奏楽が卒業式に威厳や祝賀の意を添えるためであったのとは異なり、女子師範での唱歌は学習成果の披露を強く意識したものであった。しかし、唱歌が儀礼的な時間の開始と終了とを知らせ、日常の時間と分かたれた祝祭の時間を演出する役割を果たすようになったことは、その後の学校儀式的あり方にとってたいへん重要である。

奏楽・唱歌に挟まれた授与式本体は校長演説、証書授与、謝辞と文部省関係者の演述で東京師範と同様であるが、女子師範の式は長時間を要している。それは、附属小学校や高等女学校(1885年から)と合同で式を行うことが多く、修業生への証書と賞品授与が行われ、各課程ごとに演述、授与、謝辞が繰り返される手順となっていたからである。

東京師範と合併する直前の1885(M18)年2月19日、女子師範卒業式では、大木文部卿と福羽文部省御用掛に加え、やはり当時の御用掛で、学校に祝日大祭日儀式を導入することになる森有礼が演述を行っている。また、両校合併後の1886(M19)年2月27日の東京師範卒業式では、文部大臣に就任した森が「女教員ノ心得」を演述した(『東京茗溪会雑誌』38, 1886.3)ことが特筆される。このときは、従来の東京師範に合わせて奏楽・唱歌も略された簡潔な手順であった。

さて、ここで地域の最高教育機関であった各県師範学校にも目を向けたい。長野県師範学校の1882(M15)年10月10日の式は入場、着席、敬礼の後、校長演説と証書授与があり、教員演説と祝詞、卒業生2名(1名は松本支校)の答辞というほぼ基本的な手順をとっている(信濃毎日新聞, 1882.10.26)。最後の敬礼に際して『小学教員心得書』が頒与されたことのみが、いかにも師範学校らしい。

ところが、翌1883(M16)年2月15日には非常に特徴的な手順で卒業式が行われた(信濃毎日新聞, 1883.2.14)。まず教員、生徒、参観人が講堂に会し、県令書記官が着席して一同敬礼を行う。そして、式は唱歌で始まり唱歌に終わるのである。これには、学習院監事から長野県師範学校長に転身した能勢栄の影響が大きい。能勢が長野に着任したのは1882(M15)年7月だが、同年10月から唱歌を加えた新教則を実施し、その成果を示したのが1883(M16)年の式だと考えられる。

さらに興味深いのは、能勢の演説と学事報告、卒業および進級証書授与のあと、師範卒業生が長野小学校<sup>10</sup>の生徒を率いて「進行曲」奏楽の中を講堂に入るところからである。小学生は入場すると唱歌を歌った。次いで彼らに対して5名の師範卒業生が修身、読み方、博物、唱歌、体操の教授を順次行い、それが終わると再び唱歌を披露して小学生は退場した。小学生への教授という、まさに「生」の学業成果発表が卒業式の中で展開されたことになる。

この長野県師範における成果発表は、師範生徒本人による演技や研究発表にとどまらず、子どもに教えるという行為、卒業生と小学生によるパフォーマンスそのものであった。この、5科目の教授という、いわば劇中劇の始まりと終わりにも唱歌が配されているのは、地方にあって進んだ教育内容を小学生にも習得させていることを顕示する演出でもあっただろう。式はこのあと、教諭演述、卒業生総代の答辞および謝辞(この両者の差異は不明)、県令の祝辞があり、最後の唱歌が行われて退散と記録されている。唱歌は式全体、小学生の出番の始まりと終わりを告げるメルクマールとして機能している。

もっとも、この段階で長野県師範のような形の式は特別であり、1883(M16)年2月の千葉県師範、1885(M18)年の高知県師範では、簡潔で基本的な式手順が記録されている。また、同年の宮城県師範では、来賓入場時の奏楽と教員演説が加えられているが、成果発表に類する記録は見られない。長野県師範も能勢が去った後、1886(M19)年12月25日の式は「時々奏楽ありて洋々耳に盈大いと優雅」ではあったものの、授与、知事と校長の祝詞、生徒総代祝辞という簡潔な手順に戻った(『信濃教育会雑誌』4号, 1887.1)。しかし、実地授業を含む手順は、能勢栄という強烈な個性が主導した特異な式として、単発的に終わったものではなかった。

### 3-2. 師範学校令以降の師範学校

師範学校令によって高等師範となった東京高等師範では、それまでとは全く異なる卒業式手順が採用された。1886(M19)年7月15日、男女小学師範学科および附属小学校の卒業式では、午前8時に喇叭の合図によって附属小および幼稚園生徒への実地授業が開始された。8時30分、第二の喇叭では男子生徒が体操場で兵式体操を行い、9時10分の第三喇叭に次いで奏楽と唱歌があり、そのあとの証書授与は奏楽の中で行われた。授与が終わると再度唱歌があり、校長演説、男子部・女子部・附属小それぞれの総代謝辞および作文朗読が行われた。最後にも唱歌があつて、第二奏楽で式を終えている。(『東京茗溪会雑誌』43号、1886.8)。

授与部分の手順として特徴的なのは、最初と最後に奏楽・唱歌がおかれ、証書授与の際にもいわばBGMとしての奏楽が行われていることである。喇叭、唱歌、奏楽といった西洋式の音は、儀式の時間と空間を特別な空気で満たしていった。

卒業生による実地授業を組み込んだのは長野県師範のほうが早かったが、喇叭の合図による手順の進行と兵式体操の導入は、森有礼がとった師範学校における教育政策を即座に反映したものである。東京師範では、師範学校令に先立って同年3月に陸軍大佐山川浩が校長に就任し、軍事化がいち早く進んでいた。言葉ではなく喇叭の合図によって手順が進行するためには、生徒は信号の記号体系を習得して自動的に応じられなくてはならない(Foucault 1975 = 1977, p.168)。つまり事前の訓練が不可欠である。こうした喇叭と兵式体操の導入は、政府や教育界の要人が集まり、他校のモデルとなる東京高等師範の卒業式だからこそ意義深い手順だったのである。学校で天皇制儀式が開始されるための素地は、こうした卒業式の実践によって整えられていったと解される。森は、記録にみる限りでも1884(M17)年から多くの学校の卒業式に來賓として臨席しており、演述も頻繁に行っている。卒業式が教育政策発信のために有効なイベントであることを、森は経験的に知りえていたといえよう。

しかし、兵式体操は1888(M21)年までの3年間しか行われなかった<sup>11</sup>。実地授業のほうは東京高等師範で1894(M27)年まで、再び分離した東京女子高等師範ではその前年までで姿を消していく。また、女子と分離した1890(M23)年以降、東京師範学校では唱歌も記録されていない。つまり、卒業式は成果を発表するための場ではなく、純粹に儀式となったのである。代わって、1891(M24)年4月1日の卒業式から導入されたのは、前年10月末に発布された教育勅語であった。

もともと成果発表を組み込んでいなかった府県尋常師範学校でも、儀式化は進んでいた。紀元節天長節をはじめとする国家祝祭日に学校でも祝賀式典を施行するようになるという1888(M21)年2月の文部省内示以降、卒業式も天皇制儀式の影響を受けていくことになる。長野師範と山梨師範では同年3月の卒業式から「君が代」が歌われ、山梨では整列や着席も喇叭による合図で行われた。その模様は、「式場の嚴肅整然たる卒業生の榮譽來觀人をして羨慕の念を起さしめたり」(『山梨教育会雑誌』44号、1888.4)と記録されている。さらに、千葉師範卒業式は、「進退出入肅然として整理せり殊に生徒の舉止嚴格なるは以て兵式的の訓練を見るに足れり」(『千葉教育会雑誌』117号、1888.5)との様子であったと報じられている。兵式体操という特別な形をとるまでもなく、もはや立ち居ふるまい自体に兵式的な規律・訓練の成果が現れていたのである。

教育勅語奉読はもちろんのこと、1893(M26)年8月に公布された「祝日大祭日歌詞並樂譜」に〔勅語奉答〕の唱歌が入ると、〔君が代〕に加えて〔勅語奉答〕を歌う学校も多くみられた。また、祝日大祭日儀式同様、御真影を掲げたり、「御聖影ノ扉」の奉開、奉閉も行われるようになって

いった。尋常師範の式が軍学校のように天覧で行われることはなかったが、卒業生は御真影に見守られながら証書を拝受することとなった。

こうした師範学校卒業式がもたらした影響は計りしれない。師範学校卒の訓導は赴任先での指導的立場を得て、自分が体験した儀式を広めていった。また、師範学校卒業式には多くの教育関係者が集まり、新しく取り入れられた手順を吸収して帰った。その後の学校儀式、とくに小学校の卒業式は師範学校の提示した形式にならって定まっていたのである。

### 3-3. 附属小学校

東京師範附属小と東京女子師範附属小では、師範学校と合同または師範卒業式の前後に引き続く形で式が成立した。1880(M13)年7月15日の東京師範学校卒業式では、「附属小学生徒にも證記を渡さるゝ由なるが其折り生徒の唱歌をも催さるゝ」(東京日日新聞, 1880.7.12)と予告されている。同校でのL.W.メーソンによる唱歌伝習が始まって3カ月、最新の成果発表がなされたものと推測される。女子師範と合併する前の東京師範学校では唱歌を歌わない卒業式のほうが多かったが、附属小では必ず唱歌を歌っていた。小学校の儀式に唱歌を歌うことは、両附属小での実践を基にして広まったとみてよいだろう。

しかし、両校とも1883(M16)年以前についてはごく断片的な情報を得られるのみで、師範学校と合同であったか附属小単独の式であったかも不明であり、手順についての詳細はわからない。手順が残る1884、1885(M17, 18)年の両附属小の記録を見ると、原則として唱歌に始まり唱歌に終わる式の形をとっている。唱歌以外の学業成果発表は東京師範附属小の作文朗読のみで、師範学校で行われたような体操と理科実験は記録されていない。ただし、師範学校同様卒業生総代の祝文朗読または謝辞は行われている。また、等科卒業と各級の修業とは区別して証書が授与され、優等生への賞状賞品授与が行われていることがわかる。

唱歌の学業成果以外に、師範附属小が提示した重要な成果発表は入退場のふるまいである。1884(M17)年7月31日の東京師範附属小卒業式では各等科卒業生計48名に卒業証書が、その他全員に一学期修業証書が与えられた。その手順は「二列進行式場ニ入り辻學務局長等モ亦入來ス生徒一同立礼」(『大日本教育会雑誌』10号, 1884.8)で始まっている。それ以前の手順では、たとえば1883年前期の長野師範卒業式で「一同講堂ニ入ル／來賓着席／一同敬礼」(信濃毎日新聞, 1883.2.15)とあるように、入場の仕方までは記録されていない。ところが、生徒が二列で行進して入場するというふるまい、つまり移動場面からすでに式が開始されることになったのである。手順には、続いて來賓の入場と着席、それに応じての立礼が示されており、足並みをそろえて移動する、止まる、同時に頭を下げるなどのふるまいすべてが式手順の項目として位置づけられたことを示している。

また、1884(M17)年2月16日の東京女子師範附属小では來賓が先に入場し、「皇族以下の着席を待て女兒小學校生徒第二式場に入る」(『大日本教育会雑誌』4号, 1884.2)と、従来の入場順とは逆に生徒があとになっている。こうすることで、生徒の身体とふるまいへの注視は徹底される。整列や行進といったふるまいは、調教された身体をもって教育の成果を示すことにほかならない。つまり、「試験という評価の場をくぐり抜けた結果に対する授与」に、「そこでふるまいに対して評価のまなざしが向けられる場としての卒業式」という意味が加わりつつあった。現在でも、先に着席した參觀者一同が見守る中、卒業生が音楽や拍手の中を入場行進する卒業式風景は

一般的に見られるが、そこで卒業生は身体とふるまいにまなざしを注がれることによって祝祭空間へと入っていく。その原型は明治10年代後半に生まれていたのである。

卒業式でのふるまいへ向けられるまなざしは、「(附属主任の報告で) 礼儀作法を教へられしと云はれしが其一班は証書授与の際生徒の進止肅々敬礼延寧なるによりて顕はれたり」(青森師範附属小卒業式, 東奥日報, 1894.4.1) というように、一人一人の一举手一投足が学校教育の成果として受け取られていくようになる。

#### 3-4. 公立小学校における「式」以前の証書授与

附属小以外の小学校で「式」として記録されている最初期の例として、京橋区泰明学校と下谷区下谷学校の1880(M13)年7月20日の報道があげられる。「両校とも卒業生徒五人へ賞牌と證書を授与され式が畢つて演説祝辞等もあつて中々盛んでありました」(讀賣新聞, 1880.7.22) とあるように、式は授与のみで演説や祝辞は式の終了後に位置づけられている。また、文京区立誠之小学校に保存されている明治11年からの学校日誌によれば、1881(M14)年2月14日に「自本日午後二時卒業証書授与式施行乃事」と、初めて「式」の記載があるものの内容は不明であり、1883(M16)年から1888(M21)年までは「卒業証書授与」となっている。こうした少数の例を除き、公立小学校で「式」と呼んで授与を行うことが普及するのは明治10年代も末近くになってからである。

等級制の時期、公立の小学校では試験が終了すると直ちに集計が行われ、その間児童は待機させられて、各級の結果集計が整い次第証書授与が開始された。試験は学校単位で行われるとは限らず、数校合同か試験組合によって実施されることも多かった。1883(M16)年4月7日印旛下埴生南相馬郡乙二十八号の「学区組合及び定期試験順序ニツキ」にある「合格生ニ卒業証ヲ与フル受験生ノ妨ケニナラサル様」(『千葉県教育百年史』第三卷, 1978, p.524) という注意からは、試験を受けた全員が一堂に会して授与を受けるのではなく、まだ試験中の級があっても証書の準備が整った級から順次授与が行われていたことがうかがえる。

このような状況においては、後の卒業式にみられるような整然とした厳粛さとは異なる雰囲気支配していた。教師も子どもも試験の遂行と結果判定に関心を奪われており、授与に先立って言い渡される合格発表に接しては、参観人からも歓喜や落胆の声が洩れる場面があった。その様子は、「及落宣告の結果一人が泣き出すと、群犬之に和すと云った様に、わあわあ泣声が外に徹すると云ふ有様」(『千葉県教育史』巻二, 1979, p.292) と回想されるように、落第を知って声を上げて泣き出す子どもも珍しくなかった。

しかし、こうした状態は問題視されるようになった。1883(M16)年3月の千葉県安房四郡教育会においては、「学校ハ生徒ノ徳性ヲ涵養シ礼法ヲ習ハシムル所ナレバ卒業証書ヲ授与スルハ最も鄭重整肅ナルヲ要ス故ニ試験ヲ了リタル后生徒一同又ハ二期整列若クハ着席セシメ…授与スベシ」との議が出された(『千葉県教育百年史』第三卷, 1978, p.521)。また、翌年1月の千葉県東葛飾郡小学定期試験法細則では、次の手順が示されている(『千葉県教育史』巻二, 1979, pp.828-829)。

- 一 及第生徒並ニ参観人着席
- 一 職員一同着席                      生徒立禮
- 一 校長若シクハ着席教員順次證書賞状ヲ授與ス



- 一 教員若シクハ立會員演述 生徒立禮
- 一 職員退散
- 一 生徒並ニ參觀人退散

これは「試験終リタルトキ」の手順として示されたものであって、まだ卒業式の手順ではないが、「及第生徒」とあることから、生徒のうちあらかじめ発表された及第生のみが授与の席に臨んだことがわかる。しかも、生徒參觀人に次いで職員一同という着席順が示され、職員一同の着席と教員もしくは立會員の演述に対して生徒立礼が行われている。ここで及第生が行う立礼は、国家主義的徳育の表れとしてではなく、礼法を教授した成果の発表と解するのが妥当であろう。というのも、及第宣告に引き続いて授与を行うのでは、及第生と落第生が一所に混在しており、この全員が立礼を行ったとしても形式的な意味しかもちえない。しかし、こうしてあらかじめ及第生に限定しておけば、統一された礼法のふるまいを見せることが、卒業に値する者たちだからこそ発表できる「成果」としての意味を有することになるからである。

1885(M18)年以前、師範附属以外の小学校で授与の手順がわかる記録は、管見の限りこのほかにはみられない。それは、授与が試験の一過程であったことの証左でもある。手順が記録されていないということは、おそらく及第宣告と授与のみか、せいぜい演述が加わるごくシンプルなものであって、わざわざ記録するほどの意味を感じられていなかったのであろう。しかし、上記の例では着席と退散の順序、立礼を行うべき箇所が記録され、整然とした場の雰囲気をめざそうとしている点、しかもそれが成果発表の萌芽の意味を内包している点で、公立小学校でも卒業式成立の前段階に至ったことを示している。

試験は「規格化の視線であり、資格付与と分類と処罰とを可能にする監視」であって、個人に可視性を設定するゆえに「高度に儀式化される」(Foucault 1975 = 1977, p.188) 性質をもつ。そのため、授与とセットで始められた試験は「式」と呼ばれる以前から、儀式につながる回路を内包していたのかもしれない。

### 3-5. 公立小学校の初期卒業式

公立小学校で手順まで明確に記録されている最初期の資料としては、1886(M19)年12月の開智小学校および石川県江沼郡大聖寺町の三校が合同で行った卒業式がある。いずれも屋外で行われ、着席、唱歌・奏楽、学事報告、証書授与、賞品授与、校長告辞、教員・来賓祝辞、生徒答辞の項目が含まれている(『史料開智学校』第十九卷, 1997, p.1 および『大日本教育会雑誌』47号, 1887.1)。唱歌と総代の答辞または祝文朗読のほか、学業成果の発表にあたる手順は含まれていない。「各級生徒ニ卒業証書ヲ授与ス」「各年期修了証書を授与ス」の項目が見られることから、全校生徒が一同に会しての卒業式であったことがわかる。

この2例で注目されるのは音・音楽が多く取り入れられていることで、開智で6曲の奏楽、大聖寺町では唱歌2曲を含む第八奏楽まで記録されている<sup>12</sup>。この時期に地方で唱歌科を開設できた公立小学校はまだまだ少なく、この奏楽ないし唱歌も学校の格を示す意味も含めた成果発表であったと推測される。しかし、第一の奏楽で着席、第二から第四の奏楽で三校が各年期修了証書授与を行うという大聖寺町の手順からは、奏楽・唱歌に他の意味もあったと考えられる。それは、音響装置のない当時、屋外で行う式の進行を数千人とも記録される参集者が共有するための情報

源でもあった(有本 2007, p.62)。唱歌は、儀式的場に居合わせた者に歌詞内容や曲のもつ雰囲気を与え、感情を喚起する役割以前に、次の手順に移ることや式の終了を伝える信号的な情報としても機能していたといえるだろう。また、開智小学校では準備、生徒入場、来賓着席、一同敬礼の際の合図に鐘が用いられている。音はその場に集まる者たちを包み込み、有機的な集団へと統合する作用を担っていたのである。

唱歌を導入していない小学校の例として、1887(M20)年6月25日の鳥取県旭日尋常小学校をあげておこう。学校日誌には、来賓祝詞、試験委員祝詞、生徒総代祝答、証書授与、優等生への賞品授与という手順のほか、「式場ハ本校楼上ニテ正面ニ文壇ヲ設ケ左側ニ郡吏戸長町村議員右傍ニ試験委員教員次ハ男生徒席左ニ女生席」(鳥取県公文書館所蔵旭日尋常小学校日誌)との式場配置が記録されている。学業成果の発表は行われておらず、簡潔な手順であった。

他方、地域との結びつきが強い公立小学校の中には、成果発表とは異なる意味をもつ卒業式を行う学校もみられるようになる。それは、娯楽と啓蒙の要素を含んだ式であった。1886(M19)年12月の下都賀郡栃木町男女両学校の「卒業証並昇級証書授與式」は2日ばかりで行われた(『教育時論』64号, 1887.1)。1日目には合計1025名に証書が授与され、「オルガンに和して唱歌をなし別間には博物標本陳列場を設け参観人に縦覧」がなされた。2日目は「一層の盛式」で、高等科一級卒業の4名への証書授与と優等生への賞与が行われた。午後には男校訓導が物理化学の実験を披露し、女訓導は唱歌の効用を述べた上でオルガンを使用して女生徒が唱歌数曲を演奏した。さらに中等科以上の男生徒が「遊歩場に於て徒手垂鈴球竿体操及隊列運動遊戲運動」を行った。地域の人びとに対する啓蒙や娯楽の要素を含みこんだ卒業式手順である。この日は郡長、判事、検事、病院長をはじめとする来賓と「町村特志者」のみならず、「山間の老弱男女甚多く」が参集した。実験、唱歌、体操を見聞して「来観者快を尽して去る」という様から、人びとにとっての卒業式がどのようなものであったかが想像される。ほかにも、式の直前に気球放揚を行ったり、式のあとに運動会や展覧会を催したり、夜には幻灯会を企画した例も散見される(有本 2008, p.14)。卒業生の保護者に限らず、地域の人びとは、まるで物見遊山にでも出かけるように嬉々として卒業式へと足を運び、好奇心を充足させたことだろう。卒業式をこのような形で行うことは、地域の人びとの関心を学校へと向けさせて学校に対する理解を獲得したり、就学率向上をめざすキャンペーンにもなった。

### 3-6. 公立小学校における卒業式手順の定型化

小学校令が実施されるに従って、公立小学校はあらゆる面において体裁を整え、現代の目から見る「学校らしさ」に近づいていく。前述の旭日尋常小では、1889(M22)年7月6日の卒業式から唱歌が加わった。この年の4月1日に横浜から届いた風琴に合わせ、「君が代」を歌って式を開始したのである。翌年4月の卒業式には、最初に「君が代」、最後に「蛍の光」が歌われた。間には、校長と市長の祝辞、卒業生の祝答、授与が挿まれている(鳥取県公文書館所蔵旭日尋常小学校日誌)。

また、1889(M22)年12月24日の誠之小学校卒業式では、次のような手順が残っている。「午後一時一同着席／風琴ニテ一同入場／高等三年女生天日嗣唱歌／証書授与／卒業生仰けバ尊シ唱歌／教員演説／校長卒業以後心得ヲ述／生徒英語暗唱、教員同解、同演説／高等科三年生蛍ノ光ノ唱歌」(誠之小学校所蔵学校日誌)。

この例からわかるように、卒業式の唱歌は、最初にネーションの歌が、最後（途中の要所を含むこともある）には別れをテーマとする歌が選ばれるようになっていった。さらに別の例をあげよう。

長野尋常小学校、1990(M23)年3月28日の式は、1・2年級への進級証書授与式と、3・4年級生徒及裁縫生徒による卒業式とが別に行われた。講堂正面には「畏くも今上皇帝陛下の御肖像を高く安置し奉り紫縮緬の幕を張れり其下には数個のテーブルを位置能く据へて総て緋の毛布を覆ひ三個の大花瓶」が置かれた。手順は、「一同起立生徒總体〔君が代〕の合唱」に始まり、証書授与、優等生への賞品分与、校長祝辞、卒業男生唱歌〔学びの力〕、男三年生唱歌〔蛍の光〕、職員及び来賓祝辞、女三年生唱歌〔勧学の歌〕、生徒総代諸氏の答辞の後、「〔仰げば尊し〕の唱歌にて全く式が閉ちた」のだった（信濃毎日新聞、1990.3.30）。この式も〔君が代〕で始まり、学びの歌と別れの歌を歌っている。もはや、唱歌は学業成果の発表という意味から、厳粛さや惜別の情といった感情喚起を担う役割へと変化を遂げつつあった。

これには当然、前述した1888(M21)年2月の文部省内示と唱歌〔紀元節〕の公示、さらには森文相主催による紀元節祝賀式典において〔紀元節〕が歌われ、儀式と唱歌の結びつきが決定づけられたこと、翌年の憲法発布に伴う全国的な儀式的挙行といった動きが影響を与えている。しかし、それに加えて等級制から学年制への移行と、一度の試験だけでなく平素の成績を加味する採点方式への変更によって、ほぼ似通った年齢で入学した児童が同時に卒業する比率が高くなりつつあったことも影響している。「卒業」の意味の変化が、卒業式の意義をも変化させたのである。さらに、1892(M25)年の第2次小学校令全面実施に合わせて学年度が4月始まりに統一されると、春と別れが結びついていく。その後、卒業式が春の風物詩として人びとの間に定着するようになると、卒業式の唱歌は一層感情を喚起する力を得ていく（有本 2008, p.17）。

一方、教育勅語が出されると、公立小学校の卒業式もそれを敏感に反映した。青森小学校1891(M24)年4月24日の手順は以下のとおりである。「入場、御真影開扉、唱歌（君が代）、勅語奉読、唱歌（君が代）、閉扉、修業証書授与、唱歌（君が代）、卒業証書授与、賞品授与、職員演説、生徒三名演説、唱歌（仰げば尊し）卒業生、唱歌（蛍の光）高等科尋常科生共」（『青森県教育史』第一巻、1972, pp.846-847）。3度の〔君が代〕は何とも念入りだが、御真影と勅語が導入され、最初にネーションの歌、最後に去る者たちと送る者たちによって別れの歌が交わされるという、卒業式の定型ができあがっている。1891(M24)年6月17日の文部省令第四号「祝日大祭日儀式規程」が出される以前に、すでにその形式を取り込んだ形で、卒業式手順がほぼ確定していたことになる。

さらに、卒業式手順を統一された形へと決定づけたのは、自治体が規則として手順を定めたり、教育雑誌に標準となる手順が示されたりしたことである。以下に、具体例として1892(M25)年の神奈川県小学教則をあげる。

#### 第四章第十五条 証書及賞品賞状授与式

- 一 一同着席敬礼
- 二 学校長若クハ首席教員式ヲ行フ旨ヲ演フ
- 三 学校長若クハ首席教員教育ニ関スル勅語謄本ヲ奉読ス 此間一同起立
- 四 唱歌
- 五 学校長若クハ首席教員一学年成績ノ報告

- 六 学校長若クハ首席教員修業若クハ学習証書ヲ授与ス
- 七 学校長若クハ首席教員卒業証書ヲ授与ス
- 八 唱歌
- 九 学校長若クハ首席教員賞品及賞状ヲ授与ス
- 十 唱歌

ここでは唱歌が特定されていないが、同条には「祝賀敬礼友愛ノ情ヲ感起スルニ適スヘキ歌詞及楽譜ヲ撰用スヘク」と付言されている。また、「市町村長其他臨席ノ諸員及卒業ノ児童等ノ祝文朗読若クハ演説等ハ第九ヲ終リタル後」と付記されている（『神奈川県教育史』史料編第一巻，1971，p.509）。

同じ1892(M25)年7月2日の新潟市校長訓導協議会では、最後の唱歌を〔蛍の光〕と規定したが、伊澤修二編の『小学唱歌』が出版されたのを受けて、実際には巻二所収の〔卒業式の歌〕を歌うようになったという（『新潟市義務教育史』明治編，1973，pp.363-365）。このようにして、手順のみならずどの唱歌を歌うかも、全国的にほぼ共通のパターンが定まっていた。

公立小学校の最後に、新潟県小千谷小学校 1897(M30)年3月30日の卒業式手順をあげておこう（『小千谷小学校史』，1977，p.189 掲載の学校日誌）。第二次大戦終結まで続く卒業式の定型といえる手順である。

- |           |                  |
|-----------|------------------|
| 一 一同着席    | 九 町長祝辞           |
| 二 敬礼      | 十 生徒総代答辞         |
| 三 唱歌（君が代） | 十一 来賓祝辞          |
| 四 勅語奉読    | 十二 唱歌（仰げば尊し・蛍の光） |
| 五 唱歌（奉答歌） | 十三 敬礼            |
| 六 証書授与    | 十四 退場            |
| 七 褒状賞品授与  | 十五 茶話会           |
| 八 校長誠告    |                  |

## 4. 卒業式の意義

### 4-1. 各学校における卒業式の変容

ここで再度、高等・中等教育機関に目を向けたい。軍学校の手順は、明治20年代中葉に至っても最初の卒業式からほとんど変化がない。たとえば、陸軍士官学校での1891(M24)年7月の式では、閲兵、教練、障碍飛越および難路通過が天覧に供された後、授与式が行われた。変化したと思われるのは、卒業式報道の語調と式場での距離感である。

御先着の馬車到るや樂隊ハ樂器を手にし儀杖兵ハ銃を執り仁禮校長以下参場の諸官公員學生外國教師何れも正装にて御通路の兩側に整列し奉迎の準備を為す…

係官ハ卒業者を呼出し卒業生ハ左手に釧室を握り左脇に帽を挟み玉座を距る凡そ五十メートルの處に進み陛下に向て舉手注目の敬禮を為し証書を受領して其儘十歩許り退き右の姿勢に

て元の位置に退く此時始終奏樂あり

(海軍大学卒業式, 讀賣新聞, 1891.7.29)

卒業生ハ玉座を距る百メートルの右側に整列し係官の称呼に応じて順次中央なる校長の前に  
進み玉座に向て舉手注目の敬禮を為し卒業証書を受領し左旋して元の位置に退く

(陸軍士官学校卒業式, 讀賣新聞, 1891.7.31)

報道の語調は、「儀式を語ることば」として完全に形式化されている。そして、天皇との距離は最も近づいた状態でも 50 メートルである。これより 10 年前の卒業式には距離の記載は見受けられないが、二名の生徒が「兵書の講義を叡聞に入れ夫より直に受持の教員より卒業生徒を一名づつ呼出して順次に証状を授與され右畢つて勅語を賜り」、校長が卒業生徒の前で勅語を伝える(陸軍士官学校卒業式, 讀賣新聞, 1881.12.25)という距離感とは明らかに異なっている。これには式場の物理的条件も大きくかかわっているだろうが、距離の違いは視線に決定的な影響を及ぼす。すでに巡幸の時期は終わっていた。権威に加えて聖性をも獲得した天皇は、選び抜かれたエリートたちの前に姿を見せるとしても、その視線が誰に対して向けられているのかをうかがい知るほどの距離には位置しなくなったということではないか。

軍学校以外の高等・中等教育機関でも、卒業式手順そのものより、内容に関する意味づけのほうに変容していた。東京音楽学校の唱歌の意味づけが変化したことは前述のとおりである。卒業式に行われる他の器楽や声楽の演奏は、成果発表というより音楽界へデビューする機会となり、評論家たちの批評の対象となっていくた。だが、唱歌(合唱)のほうは原曲をシューベルトやブラームスの西洋古典にとりながら、〔聖代の光〕〔卒業式の歌〕〔桂の枝〕といった儀式的な雰囲気強い内容のものとなっていた。東京音楽学校でも、卒業式の唱歌がネーションの歌と別れの歌に収斂していく傾向が読みとれる。

さて、当初から卒業式のあとには主に来賓を対象として立食や茶菓を饗応するのが常だったが、式後の祝宴に多様な余興が行われて盛大になる場合も少なくなかった。また、卒業生だけを集めた送別会が開かれたり、多数の旧卒業生が集まって同窓会的な催しとなる学校もあった。卒業式本体の儀式的な整備が進むほど、こうした付随的な要素は娯楽的な意味を強めたようである。余興の内容が学校の記録に残るケースは少なく、すべて新聞記事になるが、たとえば「余興に海軍の奏樂生徒の遊戲等」(東京英和学校, 讀賣新聞, 1889.6.18), 「余興として欧遊少女踊, 布ざらしの二曲を演じ」(成立学舎女子部, 讀賣新聞, 1891.4.5), 「式終るや落語家及び同館(引用者注=会場となった芝公園内紅葉館)の手踊等ありて頗る盛んなりし」(跡見女学校, 讀賣新聞, 1893.4.18)といった具合である。

卒業式は同窓会を組織する格好の機会でもあったため、国民英学館は第二回卒業式で早くも同窓会設立の主意演説を行っている(讀賣新聞, 1890.6.10)。また、卒業式に合わせて生徒の作品を陳列して縦覧に供し、「舊卒業の人々は久闊の情を述へ歡を盡して」母校をあとにする(女子高等師範学校, 『東京茗溪会雑誌』135号, 1894.4)というように、同窓生意識を醸成する機会にもなっていた。小学校を含め、卒業していく者たちだけが集められての送別会が、対外的な卒業式とは別に普及しはじめるのも、明治20年代半ばのことであった。卒業式という儀式は、このころに定型化しただけでなく、それまでの意義から変容をみせていたと考えられる。

#### 4-2. 天皇制儀式の前史としての卒業式

ここまで手順の検討を通して考察したことを総合すると、従来の学校儀式研究の姿勢に疑問をさしはさまざるを得ない。それは、祝日大祭日儀式規程を日本における学校儀式の基準に据え、それと照らして他の儀式をとらえる姿勢である。たとえば、山本・今野は明治24年の卒業証書授与式に理化学実験や運動会が行われている例をあげて、それは儀式の強制的な性格を緩和し生徒の心情を快活にするために、祝日大祭日儀式において普及したことが祝日大祭日儀式以外の儀式にも影響を及ぼしたものと解釈している(山本・今野 1973, p.154)。佐藤も同様に、「祝祭日儀式によって卒業式を含む他の学校儀式の性格付けが行なわれた」としている(佐藤 2005, pp.150-151)。

しかし、時系列は逆である。理化学実験や運動会は、先に成立した卒業式の中ですでに行われていたのであり、因果関係を逆転させてはならない。たしかに、祝日大祭日儀式の導入と同期して卒業式の性格も変化をみせていた。しかし、まるでおろしたての白い布が染められるようにして、学校儀式のすべてが祝日大祭日儀式によって色づけられていったわけではない。

ここで確認しておかなくてはならないのは、卒業式の中で、立礼や行進、合図による一斉動作、斉唱などが成果発表として行われ、参観されてきたことである。そうしたふるまいが可能となるよう「調教された身体」が鍛えられ、多くの視線にさらされてきたからこそ、天皇制儀式の導入が容易だったといえよう。そして、祝日大祭日儀式に取り入れられた唱歌も運動会も、御真影奉掲さえも、卒業式において試行され、実践が蓄えられていたのである。卒業式によって作られた水脈は、伏流水のように祝祭日儀式へと注ぎ込んでいったのではないか。

森が御用掛時代から多くの卒業式に立ち会い、唱歌や体操を含む手順に接していたことを考えると、1888(M21)年2月の文部省内示と〔紀元節〕の作成依頼もなんら唐突ではない。卒業式には、祝日大祭日儀式すなわち天皇制儀式の前史、さらにいうなら天皇制儀式を創出する母体としての意義を見出すことができるのである。本論では森の思想の背景まで考慮することはできなかったが、式の中で行われていた行為を検討するかぎり、卒業式を祝日大祭日儀式に接続していくものと位置づけることには妥当性があるように思われる。

さて、卒業式で〔君が代〕が歌えることも、調教された身体をもって示す教育成果のひとつであった。だからこそ、1896(M29)年7月1日の台湾総督府国語学校講習員第一回卒業証書授与式で以下の手順が取られたのであり、伊澤の、ひいては国家の教育成果を示す場として機能した。ここに、定型化した卒業式が輸出されたのである。

一同は、講習員の土語研究、竝に本島生徒の日本語教授を實地参観し、同十時三十分、一同式場に着席、君か代合唱、伊澤學務部長 勅語を奉讀し、次て柯秋潔氏漢譯の勅語を奉讀す。次に講習生一同唱歌、勅語奉答の曲 學務部長報告、及演説了て卒業證書を授與す。民政局長祝辭を述べ、卒業生總代…答辭を朗讀し、次に唱歌、(皇御國の曲)柯秋潔氏日本語の演説等にて式全く終り、一同退散せり。(『教育時論』408号、1896.8)

#### 4-3. 参観人にとっての卒業式

では、卒業式に集まった人びとは、単に天皇制儀式の準備段階へと従順に駆り出されるだけの存在だったのだろうか。

先述した、1879(M12)年の東京大学第一回学位授与式を参観した模様を書いた記事がある。こ

れは、八戸の「絲瓜堂主人」と名乗る人から郵送されたとなっており、概略は次のとおりである。

一橋門外に「白壁作りの大なる家」に出入りの頻繁な「一字の堂」があり、白昼の如く明るくして、軍服をつけたいかめしい兵士数十人が調子高い音楽を奏している。鎮守祭りが縁日の西洋風かと思ったが、神主めいた人も見えないので不思議に思って尋ねると、東京大学の「卒業証書を授くるの式」だった(『教育新誌』70号, 1880.4)。これは、式が夜7時の開始で、軍楽隊が奏楽を行い、「無切手にて」参観が許された記録と符合する。明治初期、それまで儀式を経験したことなかった人びとにとって、卒業式は鎮守の祭礼か縁日として理解されたのである。

記事は、「正面に一段高き席ありて左右の棧敷にハ官員と思しく黒き髯のある人々」が並び、高座上の人が「何やら書付を取出して」恭しく渡し、学者と覚しき人が様々の理屈を述べたが退屈になったので途中退席した、と続く。このことを郷里に帰って話すと、固陋な老人が「東京の大学ハ日本唯一の大学にして諸学校の模範となるべきものなれば萬事に注意すべき筈なるに…鎮守の神の祭禮めきたるたは事を為すハ何たる事ぞ」と息巻いた。一方、ある若者は、我村内でもそれに倣い、「卒業証書を与ふる日」には稲荷祭の提灯を借り集めて「旦那寺なる小学校の軒先に掛列ね」、「楽隊の代りには二十五座のはやしを催し」、「隣村の戸長は祭文を語るの名人なれば彼の人を頼みて一段語らせ」ようと言う。さて、どちらの説がよいだろうか、と問いかけて「絲瓜堂主人」は文を結んでいる。

ここには、初めて卒業式に接した人の戸惑いを読み取ることができる。寺子屋から小学校となった村の小学校でも、中央の上級学校が行う新奇な方法を真似たものかと思案する村人の集まりも想像される。そして、高等教育機関から小学校へ、中央から地方への情報伝播が、このような場面でも起きようとしていたことがうかがわれる。

「無切手にて」誰もが参観できる東京大学の卒業式は、「園庭にハ数百の紅燈を掛け連ね來觀人ハ宛ながら山の如く」(東京日日新聞, 1878.7.8)と記録されるように、多くの参観人を集めていた。そして、参観人は静肅に儀式に参列したのではなく、「満場鼓掌して之を賀する其響き雷霆の如く、殆ど漁史の耳をして聾ならしめん」<sup>14</sup>ほどであった。

一方、軍学校や官立師範学校ではあらかじめ切符を渡された卒業生の親戚のみが参観を許された。また、いずれの学校でも来賓には招待状が届けられた。こうした卒業式を参観できたり、式に来賓として招かれたりすることは、特権階級として認定され名誉欲を満たす機会となった。卒業生にとっての榮譽は言うに及ばない。授与する者とされる者、立会いを許す者と招かれる者は、互いに権威を高めあう関係にあった。

さて、唱歌や体操、理科実験などの学業成果発表は、伝播していく過程で娯楽の性質を強めていく。また、卒業式には当初から祝宴が付き物であったほか、式後の余興として「俗楽を奏し及雑技を演」じさせたり(学習院、『大日本教育会雑誌』22号, 1885.8)、「端舟競漕會及び擊劍相撲等を催し」(海軍兵学校、讀賣新聞, 1889.3.19)たりした。共立女子職業学校卒業式では、「諸生徒の授業を始め衆人に縦覧を許し」ただけでなく、刺繡、図画、造花などの「製造品を陳列し生徒ケ受持ちにて區を分ち購賣」(讀賣新聞, 1889.11.13)するという展示即売会も行われた。卒業式のあとに幻灯会や運動会、展覧会などの催しを行う学校は多く、とくに公立小学校では地域の人びとでにぎわった。

儀式は一般に特定されたメンバーによって営まれるが、卒業式が父兄以外の者も自由に参観できたり、縁日さえ立ってしまうケースもあったことから、学校という場が人びとをひきつけ、

接点を広げる戦略をとっていたと考えられる。卒業式は、学校的なものを社会に向けて発信し、知らしめる機能を果たしたのである。

それは、学校側からすれば啓蒙の企画でもあっただろうが、参観人たちは「快を尽くして」帰途に着いたし、式のあとに行われた学友会主催の運動会では「専傍觀人をして笑を催さしめ」（東京府尋常師範学校、『教育時論』289号、1893.4.25）た。一方で儀式の厳肅さを求められ、身体はそれに従ってふるまうことを覚えても、人びとは祭礼や見物へ出かけるかのように卒業式を楽しんでしまったかさを失っていなかった。

## おわりに

卒業式は、天皇制儀式に接続しただけでなく、学校と人びととの接点を広げたことにより、種々の学校行事につながっていったようである。卒業式が定型化するころから、卒業式に付随していた多様な内容は、送別会、謝恩会、学芸会、展覧会、父兄懇談会などの学校行事として単独に行われるようになっていった。初期卒業式の多様性が、後に分岐していく水脈を胚胎していたということであろう。

一方、卒業式は成立当初のように試験と直結して行われるものではなくなり、祭礼のイメージや娯楽の内容とも切り離されていった。そうしてさまざまな要素をそぎ落とした卒業式は、こんどは修学旅行や卒業写真といった学校の記憶をとどめる仕掛けと結びついて、別れの儀式として確立していくようになる。1900(M33)年の第三次小学校令にともなって卒業認定のための試験制度が廃止され、小学校での落第は減少する。まもなく就学率は90%を越え、単式編成の多かった小規模校が減って同年齢層の児童によって構成される学級が次第に増加するという流れの中で、卒業式に対する観念も固定していった。学校が人びとにとって見慣れた風景となったとき、卒業式は人生の通過儀礼に、つまり「国家的な時間への祝祭」と対置される、「個人の時間への祝祭」となったのだった。

\*引用文中、旧字体の平仮名を新字体に改めた。

## 註

- 1 当時の名称は「卒業証書授与式」が一般的であるが、ほかに「証書授与式」「免状授与式」「授与式」「証書式」などさまざまな記録があり、ここでは「卒業式」に統一する。また、「式次第」という言い方は後年になってからで、当時は「手順」「順序」「手続き」などが使われていた。
- 2 1873(M6)年6月に陸軍兵学寮戸山出張所として設置、翌年2月に陸軍戸山学校と改称、1875(M8)年5月からは陸軍省直轄となった。
- 3 陸軍大学は1883(M16)年開校で第1回卒業式は1885(M18)年12月24日、海軍大学は1888(M21)年開校で第一回卒業式が1889(M22)年7月29日であった。
- 4 学校に生徒を出校させて祝日大祭日儀式を举行するようにとの文部省内示が出されたのは1888(M21)年2月上旬であり、文部省令「小学校祝日大祭日儀式規程」は1891(M24)年6月17日である。
- 5 1889(M22)年には授与式には出席しなかったものの、その終了後に天皇が大学巡覧を行っており、1892(M25)年には皇太子臨席の授与式が行われた。
- 6 成島柳北「恭観\_学位授与式\_記」。ここでは『明治文化全集』（明治文化研究会編、1969、p.464）による。



- 7 これ以前に伝習を終え、郷里で唱歌伝習を開始していた伝習生もいるが、その伝習生に「証状」が交付されたかどうかは確認できていない。
- 8 当時の小学校は上等小学、下等小学に分かれ、それぞれ8級からなる等級制をとっていた。進級するには試験に及第して証書を受けることが必要で、その各級の試験に及第することを「卒業」といった。
- 9 『東京女子高等師範学校六十年史』（1934）、文部省『教育雑誌』95号、朝野新聞1879.3.14、東京日日新聞1879.3.14による。なお、『東京女子高等師範学校六十年史』（p.40）では式の日付を2月13日としているが、他の情報からすると誤りである。
- 10 当時の長野県師範学校には附属小学校が付設されておらず、同師範学校は長野小学校を練習学校としていた。
- 11 しかし、東京高等師範学校以外では、このあとになって兵式体操を取り入れた例もみられる。たとえば、松本尋常小学校は1893(M26)年3月24日の式終了後に「高等二学年男生徒ノ兵式体操ヲ行フ運動活発規律整然観ルモノ感セザルナシ」（『史料開智学校』第一巻、p.110）であったし、沖縄県師範学校でも1897(M30)年4月10日の式終了後、卒業生が武装して兵式体操や撃剣が行われた。
- 12 当時の用法では、奏楽＝器楽、唱歌＝声楽という区分が明確ではなかったと思われる。1883(M16)年2月の長野師範卒業式では、奏楽となっても「本校／長野小學生徒之ヲ奏ス」と付記されており、唱歌の演奏であったことがわかる。また、1891(M24)年3月26日の開智学校日誌にある手順には、「奏楽」とあっても各曲に学年と男女別が記されており（『史料開智学校』第一巻、1988、p.81）、生徒たちが歌ったものと解される。なお、『史料開智学校』第十九巻（1997）では、1886(M19)年の式について「唱歌は行われていないが『君が代』『皇御国』『蛍の光』などが奏でられ、儀礼的な性格が導入されつつある」（pp.588-589）と書かれているが、この解釈には疑問の余地がある。
- 13 1888年2月2日付官報で版權登録された唱歌で、作詞は高崎正風、作曲は伊澤修二である。森文相の委嘱により作られた（佐藤 2004、p.181）。
- 14 注6に同じ。

#### 〈主要参考文献〉

\*引用した新聞、教育雑誌、学校沿革誌、学校日誌、地方教育史については、本文中に示すにとどめた。

有本真紀 2007、「卒業式の唱歌——共同記憶のための生なる歌」『「感情」の社会化に関する総合的研究：「文化としての涙」の形成過程に着目して』平成16年度～18年度科学研究費研究成果報告書（研究代表者：北澤毅）。

——— 2008、「卒業式の成立と定着過程——明治期前半の教育雑誌・学校日誌を通して」『立教大学教育学研究科研究年報』第51号、pp.5-20。

Chwe, M.S. 2001, *Rational Ritual: Culture, Coordination, and Common Knowledge*. Princeton University Press (= 2003 安田雪訳『儀式は何の役に立つか—ゲーム理論のレッスン』新曜社)。

Foucault, M. 1975, *Surveiller et punir: naissance de la prison*. (= 1977 田村俊訳『監獄の誕生——監視と処罰』新潮社)。

フジタニ T. 1994, 『天皇のページェント——近代日本の歴史民族誌から』NHK ブックス。

石附実 1995, 『教育の比較文化誌』玉川大学出版部。

籠谷次郎 1988, 「学校儀式と讃美歌」松下鈞編, 『異文化交流と近代化——京都国際セミナー 1996』pp.271-277。

明治文化研究会編 1969, 『明治文化全集 別巻 明治事物起源』日本評論新社。

佐藤秀夫 監修 1988, 『史料開智学校 第一巻 学校日誌(1)』電算出版企画。

——— 監修 1997, 『史料開智学校 第十九巻 学校生活と地域1』電算出版企画。

——— 編 2002, 『日本の教育課題 第5巻 学校行事を見直す』東京法令出版。

——— 2004, 『教育の文化史1 学校の構造』阿吽社。

——— 2005, 『教育の文化史4 現代の視座』阿吽社。

多木浩二 2002, 『天皇の肖像』（新編集版）岩波書店。

Turner, V.W. 1969, *The Ritual Process: Structure and Anti Structure*. Aldine Publishing (= 1976 富倉光雄訳『儀礼の過程』思泉社)。

山本信良・今野敏彦 1973, 『近代教育の天皇制イデオロギー——明治期学校行事の考察』新泉社。